

## 初釜

初釜というのは、新年最初に行なうお茶会で、新年をお祝いすると共に、今年一年の稽古始の儀式でもあります。

もっとも、集まるのはお師匠さんと稽古仲間ですから、厳粛の内にも和気藹々としたものです。

教場では、床の間の掛け軸、お釜や水指し、茶碗なども初春に相応しいしつらえがされています。そしてこの日は、お師匠さんが自らお茶を点てて我々弟子どもに振る舞ってくれるのですが、普段は、お弟子さんのお手前を厳しく指導する姿しか見ておりませんので、お師匠さんのお手前を直に拝見できるというのも、初釜の楽しみの一つといえるでしょう。

忙しさに取り紛れて日々を送っていると季節の移ろいにも鈍感になってしまいがちですが、初釜を始め、折々の季節ごとに茶会などの行事が重ねられるというのは、ちょっと立ち止まって周りを見る機会ともなっています。

私は、お茶を習い始めて5年程になりますが、週1回のお稽古の時間は、日常の喧噪から解放される貴重なものとなっています。

お茶は、ともすれば「堅苦しい」とか「形式的」という印象を持たれている方も多いと思われます。確かにそうした面がないわけではありませんが、私は、「形」を学び身に付けていくことそのものに、大きな意味があると思っています。

お茶の場合には、例えば亭主役の人であれば、ご挨拶をして入室し、釜の前に座り茶を点て、おしまいのご挨拶をして退室するまで、全ての所作には決まり事があります。

初めの頃は、何故そうするのか理屈で覚えようとしたのですが、そうすると手が疎かになり、なかなか思うようにいきません。しかし形が身に付くようになると、逆に何故そうするのかも分かるようになるもので、稽古を通じて、形をしっかりと身に付ける事の大事さを痛感しているところです。

お茶の所作は、永年にわたって受け継がれ伝えられてきたものですが、その過程で無駄なところが省かれ、研ぎ澄まされて今の形になっています。ですから、お師匠さんのお手前などを拝見すると、実に無駄がなく、流れるようで、

美しくさえ感じられますが、それが伝統の力というものでしょう。

お茶やお花などの伝統文化、柔道や剣道などの武道には、それぞれに「形」というものがあり、その「形」を支えているものは「礼に始まり、礼に終わる」といわれるような高い精神性です。

各学校では、伝統文化や武道を授業の中に取り入れるよう工夫されつつありますが、中には、形だけ教えても、付け焼き刃で効果があるのか、と考える方もいるかも知れません。しかし、先程も述べたように、伝統文化や武道として伝えられてきた「形」には、先人の知恵と精神が凝縮されていますので、その「形」に触れ、学ぶこと自体にも大きな意味があると思っています。

最近では、挨拶がきちんと出来ない子がいると聞きますが、例えば、子ども達が登校した時に、先生や仲間に対して一度立ち止まって頭を下げ「お早うございます」と挨拶する、というようなことも、それを理屈で教えるより、まず、そうさせることが大事だと思います。それを続けていくうちに、自分が挨拶すると場の空気が柔らかくなる、自分も相手から挨拶されると嬉しいと感じる、挨拶するって大事なことなんだと分かってくる、このように「形」から理解し、学ぶことは多い筈です。

もっとも、私のような年齢になると、「形」を覚えること自体が大変で、先週指摘されたのにまた同じ間違いをしてしまう、ということがしばしばです。

師範塾の宣言にもあるように「道とは、果てしないものである。」ということを実感しています。そして、「終わりのない道だからこそ、新たな気持ちで一步踏み出そう」しびれた足をさすりながら、そんな思いにいたった初釜でした。(塾頭 吉田 洋一)